

ボランティア情報



～つながる、広がる、福祉教育～

福祉教育 わたしたちの実践

神奈川県 横浜市港北区社会福祉協議会 主事 まきの だいき さん / えん だ てつ や さん
牧野 大樹さん / 遠田 哲也さん



【“ふだんの暮らし”からはじまる福祉教育、深まる気づき】

横浜市港北区社会福祉協議会（以下、区社協）の福祉教育では、2021年より、小中学生を対象に『いま、わたしにできること』～ふだんの暮らしのしあわせ体験～というテーマで福祉教育に取り組んでいます。

プログラムは区社協で制作した福祉教育の動画を視聴した後、実際に地域の人たちが集まる居場所を見学したり、ボランティアグループと一緒に活動したりするものです。「子どもたちが地域の福祉活動を知り、ふれあうきっかけをもつことで、福祉が特別なものではなく“ふだんの暮らしのしあわせ”だと感じてもらえたらとの思いで企画しました」と牧野さん、遠田さんは振り返ります。

コロナ禍の影響により同年は実施を見送りましたが、翌2022年夏に参加を少

人数に絞って行いました。一緒に福祉教育に取り組んだのは「もろおか里山倶楽部」「高田コミュニティカフェ ゆずの樹」「文の友」です。どの団体も日頃から地域に根ざした活動を継続的に行っており、以前から区社協とも交流がありました。各地区の担当者とも連携し、「どのような気づきをもってもらえるのか」と福祉教育の目標を考えていくなかで、三者からの協力を得ることができました。

「福祉教育というと、堅苦しさやハードルの高さを感じられがちですが、そうではなく『ふだんの暮らしや日々の活動のようすから、気づきが生まれていきます』と伝えました。団体の皆さんも『自分たちの活動が福祉教育という可能性を持っているのであれば』と協力を快諾してくれました」と牧野さんは語ります。

参加した子どもたちからは「自分たちの暮らすまちには、すてきな場所があることを知ったので、友達を誘ってまた来たい」「『福祉＝大変そう』だと思っていたけど、自分のできることから始めていきたい」といった声が聞かれました。

プログラムは「あくまできっかけづくりです」と二人は口をそろえます。「参加した一人ひとりが得た気づきが、ふだんの暮らしやこれからの暮らしのなかで深まっていき、人生の選択時に活かしてもらったり、地域での行動につながっていくことを楽しみにしています。さらに、社協の事業の根底には福祉教育という視点があり、どのような気づきも大切に、発信したり、つなげていきたいです」と、区社協としての福祉教育への期待を語ってくれました。

Contents

- P.2 ▶ **特集** 地域住民との協同実践による福祉教育のいま
～福祉教育を出発点に、これからの地域の姿を描きませんか？～
- P.6 ▶ わたしにとってのボランティア
- P.7 ▶ キーパーソンから学ぼう！
- P.8 ▶ 災害ソ・ノ・ト・キ！ | インフォメーション

地域住民との協同実践による福祉教育のいま ～福祉教育を出発点に、これからの地域の姿を 描きませんか？～

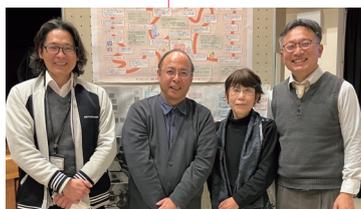
市民一人ひとりのともに生きる力を育み、共生社会の実現をめざし、全国各地で福祉教育実践が行われています。近年ではプログラムのねらいとして、「地域における相互理解」を掲げ、「教える / 教えられる」の関係を越えて、大人も子どもも当事者もみんなで学び合う「協同実践」が見られます。

本特集では、地域のボランティア活動者や当事者等とともに、地域での相互理解をめざした「協同実践」に基づく福祉教育を展開した実践を紹介し、地域のこれからの見据えた福祉教育を考えます。

事例 1

▶ 地域住民が主体となり、住民福祉活動計画の目標をゴールにした「ふくしスゴロク」を作成 ～話し合いの過程そのものが、地域づくりであり福祉教育に～

滋賀県・高島市社会福祉協議会



左から
小笠原さん、
桂田さん、中村さん、
是永さん

滋賀県の北西に位置し、湖面積を含むと県内最大の面積を有する高島市には、約 4万 5,000人の住民が暮らしています。琵琶湖に面し、陸地の約 72%を森林が占める豊かな自然のなかで、古くから農業や水産業、畜産業などのさまざまな産業が発展してきました。

高島市社会福祉協議会(以下、市社協)では、地域活動に取り組む住民の会「今津ふくしの会」と連携し、2020年から「おたがいさまふくしスゴロク」の作成を進めました。今回は、その取り組みの経緯や成果についてうかがいました。

高島市社会福祉協議会

地域福祉課 コミュニティワーカー 兼 生活支援コーディネーター 小笠原 滋さん

今津ふくしの会

代表 桂田 敏男さん 副代表 是永 宙さん / 中村 敏子さん

住民が対等に話し合える 機会としてスゴロク作成を発案

高島市では、市内に6つある中学校区ごとに、福祉やボランティアに関心のある住民が集まる「住民福祉協議会」が活動しています。そのうち今津地域で活動する協議会の愛称を「今津ふくしの会」といい、市社協で今津地域担当の小笠原さんが事務局を務めています。また、地域住民と福祉関連の専門職が地域課題を協議・連携する「今津地域セーフティネット連絡会(以下、連絡会)」も各地域で開催しており、今津地域の連絡会の主催は、今津ふくしの会が担っています。

2020年9月、小笠原さんは連絡会で、スゴロクの作成を提案しました。「連絡

会で『専門職ではない私がここにいるのもいいのだろうか』という住民の声を聞いたんです。住民と専門職の垣根がない協議の場づくりをめざしていたのに、見えない壁ができていました。それを機に、対等な立場で参加できる話し合いの場を作りたいと思うようになりました」(小笠原さん)。

こうした課題に加え、連絡会の協議では、地域課題の解決に向けたアイデ

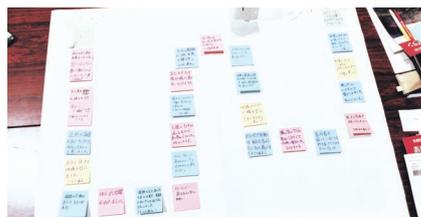


連絡会のグループワーク。考えられた文言をスゴロク状に配置する

ア出しを繰り返すのみで、実際の行動までには至っていませんでした。そこでこれまでの取り組みを振り返り、成果が見える新たなグループワークの方法として、スゴロクが生み出されたのです。

住民福祉活動計画に掲げた目標を、 スゴロクのゴールに設定

小笠原さんはまず、連絡会の参加者



グループワークの結果、ふくしスゴロクの原型ができあがった

を6つのグループに分け、グループで自由にスゴロクを作成してもらいました。ここで重要なのは、スゴロクのゴール設定です。この点について、「今津住民福祉活動計画」の活用を提案したのは中村さんです。本計画は通称「あいあいプラン」といい、今津ふくしの会が中心となって策定した、福祉のまちづくりのための行動計画です。「自分たちのまちに関心をもとう！」など4つの大目標と10ほどの小目標をまとめた冊子を全戸配布しましたが、あまり住民に認知されていないのではないかと、中村さんたちは考えていました。「あいあいプランで定めた目標を、いかに実践に結びつけていくかが課題だと感じていました」と中村さんは振り返ります。そこで、あいあいプランの小目標をスゴロクのゴールに設定することで、住民に地域づくりを身近に感じてもらおうと考えたのです。

住民の共感を得るために 試行錯誤を続けた作成プロセス

グループごとにゴールを設定したら、次はゴールまでのプロセスを考えます。ポイントは、ふだんの生活で起こりうる、地域づくりにつながる活動や出来事をマスの文言に落とし込むことです。そのうえで「すすむ」「とまる」「もどる」といったスゴロクならではのゲーム性を織り交ぜていきます。この工程ではグループごとに活発な意見が飛び交い、大いに盛り上がりました。

実は、桂田さんはスゴロクのアイデアを聞いた際、地域づくりに活かせるのかと不安を覚えたそうです。しかし「皆が熱心に協議しながら作成を進め、次第にスゴロクの完成形が見えてくるにつれ、これはよい取り組みだと実感



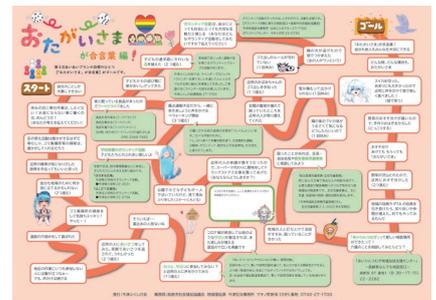
今津中学校美術部の生徒の協力により、たくさんのキャラクターが生まれた

でき、小笠原さんのねらいも理解できました」と振り返ります。

スゴロクは、グループごとに完成したものを発表し、住民に最も理解されやすいと思われるものを1つ、皆で選定しました。採用されたのは、『おたがいさま』が合言葉』をゴールに選んだグループのスゴロクです。ここからさらに、皆で検討を重ね、ある程度の完成形をつくりあげました。

しかし、そのスゴロクを是永さんが4人のお子さんに見せたところ、「正しさを押しつけられている感じがする」「自分たち子どもが感じていることを無視されている気がする」との意見が出たそうです。そこで、今津ふくしの会の定例会で、スゴロクの各マスの内容や使用している文言を再考しました。特に意識したのは、住民に自分ごととして共感してもらえる内容にすること、子どもにもわかりやすい言葉選びをすることです。そのなかで、小笠原さんが「見事なアイデアだと感じました」と語るのは、必要に応じてマスに問いかけの文言を追加したことです。例えば、「休みの日に奉仕作業はしたくない」というマスに、「あなたの考えを伝えてください」と付け加えました。これにより、一定の方向に意見を誘導するのではなく、主体的に地域づくりについて考えるきっかけを付与することができたのです。また、スゴロクの中央に空白のマスを設置し、プレイヤーが自由に言葉を書き入れることで、参加意識を高める工夫もしました。さらに、気になった情報にアクセスしやすいよう、ボランティアセンターや相談窓口の電話番号を盛り込んだほか、多世代の参加を促すため、今津中学校美術部にイラストの制作を依頼しました。

まさにスゴロクのように、進んでは戻るような制作過程を経たこともあり、スゴロクの完成には約2年かかりました。しかし、小笠原さんは「住民が話し合いを繰り返すこと自体が、地域づくりであり、福祉教育につながります」とその意義を強調します。



完成したスゴロク

子ども食堂で初披露。 盛り上がる親子を見て自信を深める

2022年に完成したスゴロクを、子ども食堂に来ていた4人の子どものとそその両親に体験してもらったところ、楽しまれたそうです。その様子から、小笠原さんたちは、このスゴロクが地域づくりを考えるツールとして活用できると、確信を得ることができました。

スゴロクは700部印刷し、小地域福祉活動を推進している関係者170人に配付されました。拡大版も作り、これまでに中学校や地域のサロンで活用されたほか、連絡会では、初めて顔を合わせるメンバー同士の距離を縮めるアイスブレイクとして導入したそうです。また、他の地域の住民から「私たちの地域でもスゴロクを作成してみたい」との声もあがっているといいます。

小笠原さんはスゴロクの可能性について次のように語ります。「多くの方にスゴロクをしていただくことで、地域づくりについて気づきを得るとともに、具体的な行動につなげていただければうれしいです。また、地域ごとにオリジナルのスゴロクづくりに取り組むことで、地域や福祉について語り合う機会になればと思います。

今後、ふくしスゴロクがどのように発展していくのかが注目されます。



スゴロク拡大版デビュー！（子ども食堂にて）

助成金情報

(公財)大同生命厚生事業団「シニアボランティア活動助成」(2023年5月25日締切)

社会福祉の推進に役立つボランティア活動を行っているか、または行おうとするシニア(年齢満60歳以上)のグループへの助成。

(詳細は「大同生命更生事業団 助成」で検索)

事例 2

「ミュージアムインクルージョンプロジェクト×福祉学習」合同プログラムのシナジーを地域に広げる挑戦 ～相互理解がつくる豊かな暮らしの実現に向けて～

兵庫県・三田市社会福祉協議会



左から、
畑さん、土田さん、
狩野さん、曾谷さん

三田市社会福祉協議会

地域福祉課 副課長 畑 清美さん

地域福祉課 地域福祉係 係長 曾谷 浩基さん

地域福祉課 ボランティアコーディネーター 狩野 仁哉さん

兵庫頸髄損傷者連絡会

広報担当 土田 浩敬さん

兵庫県の南東部に位置する三田市は、1980年代のニュータウン開発により、大阪や神戸のベッドタウンとして発展しました。急速に増え続けた人口は2011年から減少に転じ、今後さらなる人口減少が予測されています。

三田市社会福祉協議会（以下、市社協）は2022年11月、博物館におけるソーシャル・インクルージョン活動と福祉学習を合体させたプログラムを企画・開催しました。県内でも初めての試みとなるこのプログラムは、地域連携の発展にもつながる取り組みとして注目されています。

始まりは、合体すれば実りが多く なるというひらめき

兵庫県では、文部科学省が推進する障害当事者の生涯学習支援の一環として、県内の関連団体や教育機関の連携組織「ひょうご障害者の生涯学習」というコンソーシアムを結成しています。

令和4年度、同コンソーシアムは、博物館などの公共施設を、障害当事者がより楽しめる環境にしていく活動「ミュージアムインクルージョンプロジェクト」を始めました。この取り組みでは、障害当事者に博物館を訪問してもらい、当事者目線の意見や要望をフィードバックすることで、施設の改善やサービス向上につなげることを目的としています。

畑さんが同コンソーシアムのメンバーに参画していたこともあり、市社



障害当事者と初めて出会い、緊張しながら車いすの扱い方を学ぶ児童たち

協は早々にプロジェクトへの参加の意思を固めました。そのうえで、「地域の人と一緒に参加すれば、取り組みの効果はより高まるのではないか」との考えのもと、本来のプログラムに小学校の福祉学習をドッキングする企画を立案し、提案しました。同じ地域福祉の枠組みのなかとはいえ、前例のないコラボレーションであり、当初は関係者から戸惑いの声もあがりました。しかし、狩野さんが博物館や小学校、障害当事者それぞれに「福祉学習とのドッキングは双方向でのやり取りを生み、相互理解促進へつながる」など、今回の企画のねらいと意義を説明することに加え、企画書の作成、打ち合わせを丁寧に重ねたことで、関係者の理解を得ることができました。

ハード面を改善すれば快適な空間 になるとは限らない

市社協のアイデアの原点には、「施設の改善の追求だけで、障害当事者が楽しめる場所の提案につながるのか」との問題提起がありました。そもそも障害の有無にかかわらず、快適に感じる点、不快に感じる点は人それぞれで

す。また、エレベーターの設置など大がかりな対策は、予算やスペースの都合で実現できないこともあります。さらに、施設内の「点検」を主目的にしてしまうと、「あれを直せ、ここが悪い」といった一方的な要求になり、施設側が負担を感じるおそれもあります。

この点について、畑さんはお店を例に取り、次のように意図を語りました。「すべての人に快適な設備を作り上げるのは難しいでしょう。しかし、飲食店や小売店で、設備面に多少の不便を感じたとしても、店内の雰囲気や店員の対応が良ければ、気持ちよく過ごすことができますよね。逆にその点が悪ければ、もう二度と行きたくないと思うこともあります。ハード面の改善ばかりに考えが及びがちですが、その前



介助する側は、カーペットになったとたんに車いすのタイヤが沈み、重くて進みづらくなることを感じた

助成金情報

(公財)大同生命厚生事業団「ビジネスパーソンボランティア活動助成」(2023年5月25日締切)

社会福祉の推進に役立つボランティア活動を行っているか、または行おうとするビジネスパーソンのグループへの助成。

(詳細は「大同生命更生事業団 助成」で検索)

にソフト面でできることがあると思うのです」。

障害当事者と児童と一緒に博物館をめぐりながら交流する

2022年11月、市内の「人と自然の博物館」に、土田さんを含む車いすユーザー2名と、博物館近隣の弥生小学校5年生26名が集い、ドッキング企画が実現しました。

児童は3人1組になり、車いすに乗る役と車いすを押す役、その様子を記録する役を交代で務めながら、土田さんたちとともに施設内の展示を見て回ります。車いすに乗ると視線が低く展示が見つらい場合があること、じゅうたんが敷かれた床は車いすを押しにくいことなどを皆で実際に体験しつつ、児童らは土田さんたちに話しかけ、館内のどんなところを楽しんでいるか、不便を感じているかを直接聞き取りました。このように、障害当事者と児童が交流し、お互いに知り合うことこそが、2つのプログラムをドッキングした市社協のねらいです。

同じ地域で生活する仲間として障害当事者と向き合う

「エレベーターが1台しかないから、2台に増やそうではなく、自分たちが階段を使おう、と児童が気づいて行動できることが大事です。それは、一緒に館内を回ること初めて体得することなのだと思います」(畑さん)。

アイマスク体験や車いす体験は福祉教育の定番ですが、限られた時間のなかでは文字通り体験で終わってしまうことがほとんどです。畑さんは「差別や偏見が生まれるのは、人として知り



のぞく・においを嗅ぐなどの展示では「高さが変われば小さい子も車いすの人も誰でも体験できる」という気づきを共有

合っていないからです。話す機会がないから障害当事者を理解できず、避ける原因になります」と語ります。知り合う場面をつくらなければ、福祉教育として不十分であるとの思いから、今回のプログラムでは、人と人とのつながりを重視したと明かします。

特に心がけたのは、この日だけの付き合いで終わらせない工夫です。人と自然の博物館は、土田さんが勤める事業所からも、弥生小学校からも近い距離にあります。この出会いを機に、近所で見かけたら声をかけ合う関係に発展することを期待し、同一生活圏でのマッチングにこだわったのです。狩野さんは「土田さんたちを、一講師というより身近な存在として子どもたちに感じてもらうことも意識しました」と説明します。

また、土田さん自身も、児童らが打ち明けやすいよう、他愛のない会話をしたり、展示と一緒に楽しんだりすることを意識したといいます。そのかいあって、「子どもたちが遠慮なく質問してくれるのが楽しかったですね。私も、どんな質問にも答えるよう心がけました」と当日の様子を振り返ります。

地域住民にも参加を促しオープンな取り組みに

当日は、弥生小校区の地域福祉活動者が参加していました。市社協は、児童26名が獲得した福祉観を26名だけのものにせず、地域全体に広げるために、地域住民の参加も促したからです。背景には、知的障害や精神障害のある人が地域や施設内で大声を出してしまったり、通報されたりSNSにアップされたりしてしまう事案があります。彼らも地元の学校の卒業生であり、在学中は「周囲に理解されている」ことになっていても、卒業したとたんに他人になり、理解されなくなってしまうのです。こうした問題を解消するには、学校に働きかけるだけでなく、地域も巻き込み、福祉教育実践展開していくことが不可欠です。市社協では、福祉教育に地域福祉支援員も関わって

いることで、地域の関係者にも参加を促しやすい体制を整えています。

曾谷さんは、「参加された地域の方は、取り組みの趣旨をよく理解してくださり、後日丁寧な感想を寄せてくださいました。今後も積極的に地域の方にお声がけして、理解と関心を広げていきたいと思っています」と意欲をにじませます。

地域の人々が出会い、語り合う場面を設定することが市社協の役割

今回の取り組みでは、障害当事者、児童、施設のいずれからも「参加してよかった」「学びが得られた」と評価を得ることができました。すでに、博物館よりもっと生活の場に近い、スーパーマーケットを舞台にした実践の構想も始まっています。一方で土田さんは、「プログラムを通しての交流にも大きな意義があるが、もっといえば、ふだんの生活のなかで自然と交流できるのが、障害当事者が特別な存在でなくなるということだと思います」。

市社協が日頃からめざしているのは、誰もが暮らしやすい社会であるためにはどうしたらいいかを、地域の人々が集って自ら考えたり話し合ったりできる機会の創出です。畑さんは、「ベストを見つけることが目的ではなく、皆が適度に心地いいのはどんな感じだろうと話し合う、その過程こそが重要」と考えています。市社協は多様な当事者との出会いと対話と協働による学びを大切に「循環型福祉学習」の実践による「相互理解がつくる豊かな暮らし」の追求を、今後もさらに深めていく予定です。



館内見学後、「何が楽しかった?」「ふだんは何してるの?」などと土田さんに話しかける児童たち

助成金情報

(社福)松の花基金「知的障害児(者)を支援する基金」(2023年8月末日締切)

知的障害児(者)に係る事業および付帯事業に対する助成。

(詳細は「松の花基金 助成」で検索)

わたしにとってのボランティア

次世代によるボランティアのいま

若者によるボランティア・市民活動は、若者の視点や感性、若者だからこそできることを活かしながらかがりを見せています。こうした若者の活動や思いを紹介することで、若者たちにとって「ボランティア」とは何か、さらに社協VCが若者とつながる地域づくりを考えるきっかけを提供します。



左から、木村さん、和田さん

代表
立教大学コミュニティ福祉学部
福祉学科3年
和田 夏海さん

副代表
立教大学コミュニティ福祉学部
福祉学科3年
木村 梨乃さん

第1回

東京都

フロンティアーズ

立教Frontiers

団体紹介

東日本大震災の際に結成した学生の復興支援団体。年に数回、東北を訪ねて復興状況の視察や現地の人との交流を実施。書籍『気仙 辺辺(あたりほどり)の四季』に紹介されている気仙地方の自然や風習、歴史や名所などを、インスタグラムで若者向けに発信。

被災地を訪ね、さまざまな視点から学び、楽しむことも忘れない

サークル活動のなかで印象に残っていることは？

(木村さん) 気仙沼市在住の馬場国昭さんを訪ねた時のことです。震災後、仮設住宅に移った後に残されたご自身の家を「カエル塾」と称し、学生との交流の場として開放してくださっています。馬場さんから発災時のお話を聞いたり、報道されない映像を見せていただいたりして衝撃を受けました。テレビで見て知ったような気持ちでいましたが、実際に被災された方のお話には重みがあります。何回でも足を運びたいと思いました。

(和田さん) 陸前高田市に行った時、町の方々からさまざまなお話を聞いたのが印象的です。例えば、堤防について前向きな意見があれば不安を口にすることもありますが、一人ひとり違うのだなと感じました。また、震災から10年で新しい建

造物が一気に増え、とてもきれいな町になったけれど、老朽化する時も一気に訪れることが課題だということも知り、とても考えさせられました。

二人にとってボランティアの魅力とは？

(木村さん) 誰かの役に立ちたいと思って入ったサークルですが、実は、私たちが学ぶことのほうが多いなと思いました。防災意識が高まったり視野が広がったりと、自分の成長につながる場所が魅力です。

(和田さん) グループホームでアルバイトをしているのですが、利用者さんやご家族と関わる時に感じる距離感と、ボランティアで現地の方やスタッフさんと関わる時に感じる距離感とは大きく異なります。金銭の授受がないからか、ボランティアで関わる方たちとのほうが、より友達に近い距離感で接することができます。また、ボランティアならいろいろな場所に入ることができ、多くの人とつながりをもてます。こうしたことが楽しくてボランティアを続けています。

今後のサークルへの期待やボランティアに対する思いは？

(木村さん) 当サークルは2年生が幹部

として運営し、3年生からは自由参加です。後輩の子たちには、歴代の先輩方が残してくれた人とのつながりを引き継いでもらいたいと思います。また、母が介護職に就いていることもあり、子どもの頃から誰かの役に立ちたいとの思いがあるので、これからもボランティアを続けていきたいと思っています。

(和田さん) サークルの勧誘では、被災地で震災について学びたい人はもちろんですが、東北を旅行したいというのが主な動機でもいいよと話しました。ですから、サークル内にはいろいろな目的や考え方もあった学生がいます。私はそれがおもしろいと思うんです。被災地を回った後、皆で振り返りの会を行うと、一人ひとりまったく視点が違うのでとても興味深いです。今後も「また被災地に行きたい」と思える活動を楽しんでほしいです。

社協VCが若者とつながるには？

学生の多くは、社協にVCがあることを知りません。大学VCもそうですが、まずその存在が認知されなければ一歩踏み出す時の選択肢になり得ないので、既存の価値観を壊すほどの覚悟をもって新たな動きを生み出していかねばと思っています。

立教大学 ボランティアセンター
ボランティアコーディネーター 齋藤元気さん



「カエル塾」を訪ね、馬場さん(後列右から3人目)に震災当時の話を聞いた

書籍情報

(一社) 全国食支援活動協力会「子ども食堂あんしん手帖～これからも“食”で支援を続けるために～」

食支援を行う団体が「食の安全」を守り活動するための手引書として、従事者の衛生意識の向上をめざし、「子ども食堂あんしん手帖」を発行。以下のリンクから閲覧・ダウンロードができます。(詳細はこちら「子ども食堂あんしん手帖 (<https://www.mow.jp/archive/index.html>)

キーパーソンから学ぼう!



お互いにつながる はじめの一步

人と人とのネットワークをつなげながら、人々の生活に直結するさまざまな困りごとにアプローチをしているキーパーソンを紹介します。

さまざまな分野のキーパーソンから協働のヒントを探り、読者の皆さまもはじめの一步を踏み出しましょう!

第1回

人とのつながりも企画も、おもしろがることを大切にしたい



兵庫県 NPO法人 月と風と
代表 清田 仁之さん

熊本県植木町出身。お笑いと阪神タイガースが好きなお笑いの大学に進学。大学卒業後、会社員を経て福祉業界へと進み、ヘルパーとして4年勤務した後、2006年にNPO法人月と風とを設立。ヘルパー派遣やイベント、チャリティーショップの運営などを行う。

「友達がほしい」と言われたことが法人設立のきっかけです

当法人の中心活動は、重いしょうがいのある方へのヘルパー派遣です。ほかに、誰でも楽しく参加できる交流会や発表会、当事者の仕事づくりなどにも取り組んでいます。設立のきっかけは、私が施設でヘルパーとして勤めていた時、派遣先の少年から「友達がいい」と言われたことです。私自身が友達になれたらよかったのですが、私はヘルパーとして週3回通いながらも、仕事なので必ず17時に引き上げます。これでは友達とはいえないだろうと思いました。そこで友達をつくる機会を提供したいと思いましたが、当時の勤務先にはそうした支援の仕組みがありませんでした。それなら私が立ち上げるしかないと思ったのです。

イベントの実行委員会参加を機に、多くの人とつながることができました

設立から3年は、ほぼ1人で活動しており、なかなか取り組みやつながりを広げることができませんでした。しかし、尼崎市で開催された「みんなのサマーセミナー」の実行委員会に参加したことが、大きな転機になりました。実行委員会には民間から行政まで多様な分野の人がいて、皆、フットワークが軽く何ごとも

おもしろがる人ばかりでした。私が企画する「耳が聴こえない人との漫才」や「目が見えない人との闇鍋」など、少し変わったイベントに楽しんで参加してくれたら、困っている時には力を貸してくれたらいいなと思いました。実行委員会での出会いを機に、つながりも活動の幅も一気に広がっていったのです。また、そうした人たちに興味をもってもらえたことで、私自身も「この活動は間違っていなかったんだ」と自信をもてるようになりました。

真面目さよりも、「おもしろがる視点」が大事です

私がお笑い好きなこともあり、日々の活動では常におもしろがることを大事にしています。例えば、しょうがいのある方から「自分が話すと、皆、シーンとして真面目に聞くので、おもしろいことを言ったりばけたりできない」と相談されたことがあります。そこで、当事者との漫才を企画して披露したところ、大いに

受けたのです。ネタづくりでは当事者を傷つけるような話題や悲壮感を出さないことを意識しました。やはり、話を聞いた人に「しょうがいがあると大変だな」と思われると心理的に引かれてしまい、友達になるような関係づくりは難しい気がするのです。それよりも「この人おもしろいな」と思ってもらえるほうが心の距離が縮まりますよね。

全国の社協の皆さんも、真面目に取り組むことはもう十分できていると思いますので、これからは「おもしろがる視点」をもっといただくとよいのではないのでしょうか。また、社協のなかだけで考えているといろいろと煮詰まってくることもあると思いますので、どんどん地域の団体や関係者に相談するとよいと思います。そうすると、私と一緒に漫才をした当事者のように、やる気のある人に思いつけないかたちで活躍してもらえる場所が、たくさん見つかるのではないかと思います。



車いすユーザーと演じた新喜劇のひとこま。
イベント「ミーツ・ザ・福祉」にて



銭湯を貸し切って皆で入浴。
ナイトプールの雰囲気を出した

書籍紹介

『月刊福祉』2022年5月号 (全社協出版部) 価格1,068円 (本体971円)

特集は、「続・子どもを中心においた支援を実現するために」。子どもを中心においた社会をつくっていくうえで、あるべき制度や支援のかたち、求められている支援者の姿勢について確認する。(詳細は「福祉の本出版目録」で検索)

災害ソノトキ!

～災害時の連携に向けて、
平時から考えたい協働の視点～

災害時は、被災者をより適切・効果的に支援するために、被災地内外のボランティア・NPO、行政等との連携協働が必要不可欠です。

本連載では、実際に災害VCを運営した社協の取り組みから、災害時の連携や平時の取り組みについて学びます。

第1回 熊本県 八代市社会福祉協議会

本気の姿勢と、迅速かつ丁寧なコミュニケーションを!



左から、松山さん、局長の松本さん、氏原さん

八代市社会福祉協議会
地域福祉課長
うじはら こうじ
氏原 耕二さん
地域福祉課
まつやま ひろふみ
松山 弥史さん

被災時の災害ボランティアセンター (以下、災害VC)の状況

令和2年7月豪雨において、八代市で最も被害が大きかったのは坂本町です。球磨川沿いの道路と線路が崩壊し、橋も流出、山間部では土砂崩れが発生し、孤立した集落もありました。車も電車も通行不能となり、現地の福祉センターから15km離れた市食肉センター跡地に災害VCを設置しました。

しかし更地だったため、コンテナの設営や電気水道工事などインフラ整備に時間を要し、ボランティア活動を開始できたのは発災から11日後でした。その間、全国から「まだ活動が始まらないのか」等のお電話が多数ありました。そこでFacebookに「被災地へのアクセス方法が限られ、多くの皆さんに来てほしいけど制約があるジレンマ」と題し投稿したところ電話がビタリと止まり、SNSの力の大きさを実感しました。



活動開始が遅いとの問い合わせがビタリと止まったFacebookの投稿記事

3者協定による平時からの取り組みが、 発災時のスムーズな連携に

平成31年に、八代青年会議所と氷川町社協、八代市社協とで「災害発生時における被災地支援等に関する協力協定」を締結しており、3者で年1回の意見交換や災害VC設置訓練をしていました。今回は発災の前月に意見交



団体連絡会議3回目の様子。
地図を広げ、各団体の活動場所等の共有

換を行ったばかりだったこともあり、スムーズに連携が取れました。担当者間でライン等を通し、時間を気にせず情報共有や連絡調整のやり取りができたので便利でした。

坂本町支援活動団体連絡会議の結成により 各団体と密に連携・協働

坂本町では約10団体がさまざまな活動に取り組んでくださいました。しかし、市社協は水害時の家屋復旧について勉強不足もあり、それらの団体の壁剥がしや消毒などの活動について理解していませんでした。また、団体との面識もなかったことから、発災後しばらくは個別に活動していたのです。しかし、市社協が単独でできることには限界があり、各団体の得意分野も異なります。そこで青年会議所の声かけにより立ち上げたのが「坂本町支援活動団体連絡会議」です。市社協と各団体で定期的に情報を共有し、連携・協働することで非常に効率よく活動ができるようになりました。八代市にも会議に参加いただき、被災家財仮置場の受付時間延長など要望等にも対応いただきました。発災当初から会議を実施していればもっと早く復旧が進んでいたことでしょう。

支援活動中や平時からの関係づくりで 大切なこと

団体の皆さんと関わるなかで、メッセージンググループや会議での受け答え、活動後のフォローは表面的なものではなく、本気の姿勢を見せることが大切であることや、できることできないことも含めて腹を割って話せる関係性の構築が大事だとわかりました。今後も、市社協のファンとなって応援していただけるような関係性を築くため、定期的な情報発信と気持ちよく活動いただけるよう丁寧なコミュニケーションを心がけていきます。

インフォメーション

ボランティア活動者数調査へのご協力をお願いいたします

全国ボランティア・市民活動振興センターでは、全国の都道府県・指定都市、市区町村社会福祉協議会を対象に、毎年ボランティア活動者数調査を実施しています。調査へのご協力をよろしくお願いたします。

1. 回答方法 市区町村社協(ボランティア・市民活動センター)宛にお送りしているEメールに記載の回答方法からご回答ください。
2. 回答締切 2023年5月12日(金)
3. これまでの調査結果
 - 「ボランティア・市民活動推進情報ページ」
<https://www.zcwc.net/volunteer/reference/zenshakyovc/>
 - 「全社協 被災地支援・災害ボランティア情報」
<https://www.saigaivc.com/earthquake/311/>